

梶井基次郎

路上





路

上



自分がその道を見つけたのは卯うの花の咲く時分であつた。

Eの停留所からでも帰ることができる。然もM停留所からの距離とさして違わないという発見は大層自分を喜ばせた。変化を喜ぶ心と、も一つは友人の許もとへ行くのにMからだとは大変大廻りになる電車が、Eからだと比較にならないほど近かったからだだった。或る日の帰途気まぐれに自分はEで電車を降り、あらましの見当と思う方角

へ歩いてみた。暫く歩いているうちに、なんだか知っているような道へ出て来たわいと思った。気がついてみると、それは何時いつも自分がMの停留所へ歩いてゆく道へつながつて行くところなのであった。小心翼翼々と云ったよ  
うなその瞬間までの自分の歩き振りが非道ひどく滑稽に思えた。そして自分は三度に二度と云うふう<sup>に</sup>にその道を通るようになった。

Mも終点であつたがこのEも終点であつた。Eから乗るとTで乗換えをする。そのTへゆくまでがMからだとしてEからの二倍も三倍もの時間がかかるのであつた。電車

はEとTとの間を単線で往復している。閑のどかな線で、発車するまでの間を、車掌がその辺の子供と巫山ふざけ戯けっていたり、ポールの向きを変えるのに子供達が引張らせて貰きったりなどしている。事故などは少いでしようと言きくと、いやこれで案外多いのです。往來を走っているのは割合に少いものですが、など車掌は云っていた。汽車のように枕木の上にレールが並べてあつて、踏切などをつけた、電車だけの道なのであつた。

窓からは線路に沿った家々の内部なかが見えた。破屋あばらやといふのではないが、とりわけて見ようというような立派な

家では勿論もちろんなかつた。然し人の家の内部というものにはなにか心惹ひかれる風情ふぜいといったようなものが感じられる。窓から外を眺め勝ちな自分は、或る日その沿道に二本のうつぎを見つけた。

自分は中学の時使った粗末な検索表と首っ引で、その時分家の近くの原っぱや雑木林へ卯うの花を捜しに行っていた。白い花の傍へ行つては検索表と照し合せて見る。箱根うつぎ、梅花うつぎ——似たようなものはあつてもなかなか本物には打つからなかつた。それが或る日とうとう見つかった。一度見つかったとあとからあと



からと眼についた。そして花としての印象は寧ろ平凡であつた。——然しその沿道で見た二本のうつぎには、やはり、風情と云つたものが感ぜられた。

或る日曜、訪ねて来た友人と市中へ出るのでいつもの阪を登つた。

「此処を登りつめた空地ね、あすこから富士がよく見えただよ」と自分は云つた。

富士がよく見えたのも立春までであつた。午前は雪に被われ陽に輝いた姿が丹沢山の上に見えていた。夕方に

なつて陽が彼方<sup>かなた</sup>へ傾くと、富士も丹沢山も一様の影絵を、  
茜<sup>あかね</sup>の空に写すのであつた。

——吾々は「扇を倒<sup>さまさま</sup>にした形」だとか「摺鉢<sup>すりばち</sup>を伏せ  
たような形」だとかあまり富士の形ばかりを見過ぎてい  
る。あの広い裾野を持ち、あの高さを持った富士の容積、  
高まりが想像出来、その実感が持てるようになったら、  
どうだろう——そんなことを念じながら日に何度も富士  
を見たがつた、冬の頃の自分の、自然に対して持った情  
熱の激しさを、今は振り返るような気持であつた。

（春先からの徴候が非道ひどくなり、自分はこの頃病的に不活撥な気持を持ってあましていたのだった。）

「あの辺が競馬場だ。家はこの方角だ」

自分は友人と肩を並べて、起伏した丘や、その間に頭を出している赤い屋根や、眼に立ってもくもくして来た緑の群落のパノラマに向き合っていた。

「此処あっちから彼方へ廻ってこの方向だ」と自分はEの停留所の方を指して云った。

「じゃあの崖がけを登って行って見ないか」

「行けそうだな」

自分達は其処そこからまた一段上の丘へ向った。草の間に細く赤土が踏みならされてあつて、道路では勿論なかつた。そこを登って行つた。木立には遮さかられてはいるが先程の処よりはもう少し高い眺望があつた。先程の処の地続きは平にならされてテニスコートになっている。軟球を打ち合っている人があつた。——路らしい路ではなかつたがやはり近道だつた。

「遠そうだね」

「彼処あそこに木がこんもり茂っているだろう。あの裏に隠れ

ているんだ」

停留所は殆ど近くへ出る間際まで隠されていて見えなかった。またその辺りの地勢や人家の工合では、その近くに電車の終点があるうなどとはちよつと思えなくもあつた。どこか本当の田舎じみた道の感じであつた。

——自分は変なところを歩いているようだ。何処か他国を歩いている感じだ。——街を歩いている不<sup>ふ</sup>図<sup>と</sup>そんな気持に捕らえられることがある。これから何時<sup>い</sup>も<sup>つ</sup>もの市中へ出てゆく自分だとは、ちよつと思えないような気持を、自分はかなりその道に馴<sup>な</sup>れたあとまでも、またしても味

わうのであった。

閑散な停留所。家々の内部の隙見える沿道。電車のなかで自分は友人に、

「旅情を感じないか」と云って見た。穀斗科かくとこの花や青葉の匂いに満された密度の濃い空気が、しばらく自分達を包んだ。——その日から自分はまた、その日の獲物だった崖からの近道を通うようになった。

それは或る雨あがりの日のことであつた。午後で、自分は学校の帰途であつた。

何時もの道から崖の近道へ這入はいった自分は、雨あがり  
で下の赤土が軟やわらかくなっていることに気がついた。人の  
足跡もついていないようなその路は歩く度少しずつ滑すべっ  
た。

高い方の見晴らしへ出た。それからが傾斜である。自  
分は少し危いぞと思った。

傾斜についている路はもう一層軟かであった。然し自  
分は引返そうとも、立留って考えようともしなかった。  
危ぶみながら下りてゆく。一と足下りかけた瞬間から、  
既に、自分はきつと滑って転ころぶにちがいないと思った。

——途端自分は足を滑らした。片手を泥についでしまった。然しまだ本気にはなっていないなかつた。起きあがろうとすると、力を入れた足がまたずるずる滑って行つた。今度は片肱ひじをつき、尻餅をつき、背中まで地面につけて、やっとその姿勢で身体は止つた。止つた所はもう一つの傾斜へ続く、ちよつと階段の踊り場のようなつた所であつた。自分は鞆かぼんを持った片手を、鞆のまま泥についで恐る恐る立ち上つた。——何時の間にか本気になつていた。

誰かが何処かで見ていやしなかつたかと、自分は眼の



下の人家の方を見た。それらの人家から見れば、自分は高みの舞台上で一人滑稽な芸当を一生懸命やっているように見えるにちがいがなかった。——誰も見ていなかった。変な気持であった。

自分の立ち上ったところは稍々安全であった。然し自分はまだ引返そうともしなかったし、立留って考えてみようともしなかった。泥に塗れたまままた危い一步を踏み出そうとした。とっさの思いつきで、今度はスキーのようにして滑り下りてみようと思った。身体の重心さえ失わなかったら滑り切れるだろうと思った。鋏びょうの打っ

てない靴の底はずるずる赤土の上を滑りはじめた。二間余りの間である。然しその二間余りが尽きてしまった所は高い石崖の鼻であつた。その下がテニスコートの平地になつてゐる。崖は二間、それ位であつた。若し止まる余裕がなかつたら惰力で自分は石垣から飛び下りなければならなかつた。然し飛び下りるあたりに石があるか、材木があるか、それはその石垣の出っ鼻まで行かねば知ることが出来なかつた。非常な速さでその危険が頭に映じた。

石垣の鼻のザラザラした肌で靴は自然に止つた。それ

はなにかが止めてくれたという感じであった。全く自力を施す術はどこにもなかった。いくら危険を感じていても、滑るに任せ止まるに任せる外はなかったのだった。飛び下りる心構えをしていた脛はその緊張を弛めた。石垣の下にはコートのローラーが転がされてあった。自分ばかりよとんとした。

何処かで見っていた人はなかったかと、また自分は見廻して見た。垂れ下った曇空の下に大きな邸の屋根が並んでいた。然し廓寥として人影はなかった。あつけない気がした。嘲笑っていてもいい、誰かが自分の今為た

ことを見ていてくれたらと思った。一瞬間前の鋭い心構えが悲しいものに思い返せるのであった。

どうして引返そうとはしなかったのか。魅せられたように滑って来た自分が恐ろしかった。——破滅というものの一つの姿を見たような気がした。成る程こんなにして滑って来るのだと思った。

下に降り立って、草の葉で手や洋服の泥を落しながら、自分は自分がひとりでこうふん亢奮しているのを感じた。

滑ったという今の出来事がなにか夢の中の出来事だったような気がした。変に覚えていなかった。傾斜へ出か

かるまでの自分、不意に自分を引摺り込んだ危険、そして今の自分。それはなにか均衡のとれない不自然な連鎖であった。そんなことは起りはしなかったと否定するものがあれば自分も信じてしまいそうな気がした。

自分、自分の意識というもの、そして世界というものが、焦点を外れて泳ぎ出して行くような気持に自分は捕らえられた。笑っていてもかまわない。誰か見てはいなかったかしらと二度目にあたりを見廻したときの廓寥とした淋しさを自分は思い出した。

帰途、書かないではいられないと、自分は何故か深く思った。それが、滑ったことを書かねばいられないという気持か、小説を書くことによつてこの自己を語らないではいられないという気持か、自分には判然はつきりしなかつた。恐らくはその両方を思っていたのだつた。

帰つて鞆を開けて見たら、何処から入つたのか、入りそうにも思えない泥の固りが一つ入っていて、本を汚していた。

——一九二五年九月——







日本文学電子図書館

---

檸檬

著者：梶井基次郎

制作者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社

昭和44年8月20日 4刷

---



日本文学電子図書館